

洛書

「グローバル人材」考

松浦 健二

ノースカロライナ州の
ラーレイでこの原稿を書いて
いる。

この10年間、何とか時間を
確保して毎年1ヶ月間は海外
で過ごしてきた。かつてボス
トンに住んでいた頃に英語で
の仕事には慣れたが、実戦力
を維持するには最低限の時間が必要だと身にしみて
感じている。今年はケンタッキー大とノースカロラ
イナ州大で講演の依頼があったので、野外調査と共
同研究の打ち合わせを兼ねて来ている。一緒に来た
学生たちも、この1週間で慣れてきたようで、現地
の学生らと楽しんで話をしている。皆、口々に自分
の英語力の無さがもどかしいと言っている。必要性
を自分の身で痛いほど感じることで初めて学びが始
まる。

日本の大学教育において、グローバル人材の育成
は私が学生だった頃からずっと掲げられているし、
今の本学の改革プランの中でも、英語教育の強化と
グローバル人材の育成が目標として掲げられている。
長年の課題でありながら、むしろ学生の内向き志向
が問題化しているということは、教育とニーズの間
に何か根本的なズレがあるのかも知れない。学ぶ側
に立ってみれば、英語はもちろん、グローバルに活
動することすらも、何らかの目的を達成するための
手段であって、それ自体が目的ではない。その必要
性は、教壇から叫んで伝わるものではなく、あくま
で学生本人の人生プランに基づいて実感すべきも
のだ。

私は正直なところ英語という言語自体には全く興
味がなく、十数時間もエコノミー席に閉じ込めら
れて海を渡りたくもない。しかし、科学に携わる者
として、研究を遂行するためには英語力は不可欠で
あり、海外の研究者と会って交流しなければできな
い仕事がほとんどである。深い交流をするために必
要な力を身につけるには、どうしても海外での研究



経験が年単位で必要となる。なぜなら、様々な国の
研究者と楽しく対等に議論するために必要なのは、
言語そのもの以上に、文化の違いを乗り越えるユー
モアであったり、何より場数に裏打ちされた度胸で
あったりするからだ。実戦力を身につけようと思え
ば、TOEICのスコアを気にするより、海外に渡っ
て外から日本を見る経験をすべきだ。

英語教育のズレの原因は、ネイティブ英語が国際
英語だと錯覚しやすいところにもある。ハーバード
大にいたころ、研究室には10カ国以上の学生とボス
ドクがいた。ロシア英語、ジャーマン英語、スパ
ニッシュ英語・・・、様々なアクセントの英語が飛
び交う多国籍英語の環境であった。英語のネイティ
ブ達も、多国籍英語のバリエーションを理解でき
るように訓練されているので、多少の発音や文法の誤
りがあっても通じる。日本人は特に発音にコンプ
レックスを感じやすいが、大した問題ではない。シャ
イで話さないのが一番の問題で、「向こうの母国語
に合わせてあげているのだから、ネイティブも理解
の努力をするのは当然だ」くらいに思っちょうど
良い。ネイティブがすなわち「グローバル人材」では
ないように、グローバル人材の育成において、英語
教育は小さなパーツの一つに過ぎない。

では、グローバルな人材とは、一体何を指すのか。
思うに、それは多様性を受け入れることのできる大
きなキャパをもつ人のことであろう。言語力はその
キャパを拡げるためのひとつのツールである。様々
な国の人々の文化や価値観の多様性を理解し受け入
れることのできる能力は、言語よりもずっと重要で
ある。これは国際交流に限ったことではなく、科学
における異分野交流においても同じであろう。専門
化、細分化された個々の分野の中に閉じこもってし
まっては、広い視野を持ったグローバルな研究展開
はできないだろう。果たして自分はグローバル人材
と呼べるのか。教員自身が問い続け、学生達に進む
べき方向を背中を示すことが、グローバル人材育成
に最も必要なことではないだろうか。

(まつうら けんじ 農学研究科教授、専門は昆
虫生態学、社会生物学)